

## 東京藝大 × みずほ FG 「アートとジェンダー」共同研究プロジェクト

### 「アートとジェンダー研究会」リサーチ企画シリーズ

東京藝術大学（以下、本学 / 藝大）とみずほフィナンシャルグループ（以下、みずほ FG）は、2023 年度に包括連携協定を締結し、様々な連携事業に取り組んでいます。「アートとジェンダー研究会」は 2023 年度からスタートし、初年度は藝大内者とみずほ FG 社員に向けたレクチャーシリーズと、藝大内有志によるリサーチプログラムを展開しました。2 年目となる今年度は、有志の藝大生や教員が 4 つのリサーチプロジェクトを立ち上げ、展開しています。

## 東京藝大 × みずほ FG 「アートとジェンダー」共同研究プロジェクト

### 「アートとジェンダー研究会」リサーチ企画シリーズ

ショーレ・ゴルパリアン × 大石みちこ

〈VOICE —Art & Gender—〉

対談 イラン映画に響く声

— Woman' s Voices from Iranian Films —

日時：2024 年 5 月 14 日（火）18:30 ～ 20:00

場所：東京藝術大学 上野校地 国際交流棟 3 階 コミュニティサロン

登壇者：ショーレ・ゴルパリアン（通訳翻訳家 / プロデューサー）

大石みちこ（脚本家 / 東京藝術大学大学院 映像研究科教授）

「アートとジェンダー研究会」リサーチプロジェクトの第一弾として、本学映像研究科の大石みちこ教授が企画したトークイベントを開催しました。

本イベントでは、イランの女性映画プロデューサーである、ショーレ・ゴルパリアン氏を登壇者として迎えました。ショーレ氏は 1979 年に来日して以来、今日に至るまでイランと日本の映画・映像に携わってきました。

大石教授が聞き手となり、イラン映画に描かれた女性や、イラン映画を作る女性たちについて、またショーレ氏が審査員を務めた 2023 年の愛知女性映画祭、世界の映画が語るジェンダーなどのトピックについて、対談を行いました。

また、対談の終了後には、参加者を交えてのささやかな茶話会を開催しました。2024 年現在のイラン女性の暮らしやファッション等の話題を織り交ぜながら、参加者と共にイランと世界のジェンダーの未来を語り合う場となりました。

下記は、当日行われた対談を抜粋したレポートとなります。

イランにおける女性の経験について丁寧に紐解かれていますので、ぜひご一読ください。

司会・難波 トークが始まる前に説明しますと、「東京藝大 × みずほフィナンシャルグループアートとジェンダー研究会 共同プロジェクト」というのは、去年から立ち上がっておりまして、キュレーション教育研究センターとみずほFGが進めております共同研究です。具体的には、去年5回ほど「アートとジェンダー」をテーマにレクチャーを開催し、レクチャーの後にディスカッションを行いました。リサーチャーから提出された「アートとジェンダー」をテーマとしたプロジェクトから4本を選び、今後進める予定です。その第一弾として、リサーチメンバーである大石みちこさんの企画で本日のトークを開催することとなりました。さっそくトークの方をお願いしたいと思いますけれども、まずはご紹介します。



#### ● ショーレ・ゴルパリアンについて

大石 ご紹介ありがとうございました。大石みちこです。どうぞよろしく申し上げます。今回のトークイベントはみずほFG様のおかげで開催できましたたことを、感謝申し上げます。そして、私は大学院映像研究科映画専攻の教授でございますが、キュレーション教育センターの皆様にご協力いただき準備を進めてまいりました。どうもありがとうございます。最初に今日のゲストであるショーレさんについてご紹介します。こちらに本を持ってきましたが、ショーレさんは2021年に『映画の旅びと イランから日本へ』（注1）という自伝的なエッセイを出版されました。本の帯に「憧れの日本に来てから40年。世界を席卷する個性派揃いの監督たちとともに、映画をつくり、訳し、拓めつづけ、二つの文化に橋をかけたイラン女性の半世紀」とあります。

ショーレさんの人となりはまさにこの言葉の通りです。日本語で何一つ不自由することなくコミュニケーションを取れますので、最後に茶話会も用意しておりますが、どうぞ日本語で話しかけていただければと思います。

ショーレさん、40年前、日本に憧れて来日されるまでの経緯を聞かせてください。

ショーレ 私は子供の頃、お母さんから一冊のペルシャ語の本を読んでもらいました。その本は日本の昔話がペルシャ語に訳された本だったんですね。その本を読んで日本に行きたいと思っていました。持っていた小さなチャドール（イランの服）を体にグイグイッと巻いて、着物だと言ってはちょこちょこ歩いて。将来は日本に行って天皇の嫁になると思っていました。大学を卒業して22歳の時に日本に来たんですけど夢は叶いませんでした（笑）。

大石 そして日本にやってきて、まず日本のドラマやアニメをイランに紹介し、イランの映画を日本に紹介し、ということをしたそうですが、最初は日本の何をイランで紹介されたのでしょうか？

ショーレ イランにいた大学時代は、三井物産でアルバイトをしていたんです。関西弁の方が多くて、私がまず覚えた日本語は「おおきに」と「ほんまでっか」でした（笑）。そして日本に来て、映画の仕事に入る前にイラン大使館の大使秘書をしながら日本語を学びました。

イランイラク戦争が起きて、私はイランに戻らず日本にいたんですけど、戦争が終わると、お母さんからはいい加減に帰ってこいと言われてイランに戻りました。イランのテレビ局で日本のアニメやテレビドラマをペルシャ語に訳しました。

大石 どのようなものを紹介されたのでしょうか？

ショーレ NHKの朝ドラ『おしん』（注2）がイラン

で放送された時、私は日本にいたのですが、イランでは『おしん』が流行っていたそうです。『おしん』はアジアの国々では何回も再放送されていました。私がイランに戻った時には、日本のNHKの朝ドラ『はね駒』（注3）の買い付けがあってペルシャ語に訳しました。大河ドラマ『武田信玄』、アニメ『一休さん』『水戸黄門』などをペルシャ語に訳しました。その2年間はすごく忙しかったです。

大石 さて、そんなショーレさんと私との三つの接点を挙げてみました（スライド）。ひとつ目は2012年、イランの映画監督であるアッバス・キアロスタミ監督作品、映画『ライク・サムワンイン・ラブ』（注4）。私はこの時、プロデューサーから連絡をいただき「予算も日数も無いが、日本語の台本をブラッシュアップして欲しい」と言われて、日本語監修という形で参加しました。ショーレさんは監督補をしていました。

二つ目の接点は、大学院映像研究科で2015年から始まり2024年現在も行う予定ですが、イランの脚本家・ナグメ・サミニを招いて国際脚本ワークショップ（注5）を行なってまいりました。ナグメさんがペルシャ語で話し、ショーレさんが日本語に訳するという形で、1週間から10日程度、ナグメさんの指導のもとで短編脚本を書き、最後に発表会を行なうワークショップです。その過程でコミュニケーションをとるようになり、イランの女性は何を考えているのか？もう少し深掘りしたくなりました。



そして三つ目は、脚本家としてのナグメさんのインタビューを2020年1月、真冬に採ったインタビューを『月刊シナリオ』（注6）に載せた事でした。

途中コロナなどで途切れることもあったけれども、ワークショップを通じてナグメさん、ショーレさんと関わりを持ち、私が一番、文化的に衝撃を受けたというか、違うなあと思ったのは、女性はヒジャブ（女性のイスラム教徒が頭や身体を覆う衣類）を巻く。それから、豚肉は食べない、ということでした。ヒジャブは女性に関わるきまりですが、どうということなのか解明したくなり、今回の対談の企画を提案しました。

ショーレさんと話している時にいつも叱られるのが、中東、という言い方をすると叱られます。イランと言いなさいと。私たちの国はイランだと言われます。それで、まず今日はイランがどこにあるのか、ということから話を進めていこうと思います。

さてこれが現在のイランなのですが。（※スライド＝現在のイランの地図及びペルシャ帝国の地図）今日はここまで遡って話を始めたいと思います。

ショーレ そうですね、40年前、日本に来た時は「どこから来たんですか？」と聞かれて「イラン」と言うと、「イランってどこ？」みたいな反応でした。でも、「ペルシャ」と言うと、「ああペルシャ人ですね」と言われたことがあるんです。だから日本ではペルシャって言った方が馴染みがあるんだなあと思ったんですけれども。

#### ● アケメネス朝ペルシャ （前550年～前330年）

ショーレ イランは何世紀にもわたる伝統と社会的価値観を持つ古い国です。

イスラム教以前、イランの女性は社会で大きな役割を果たしていました。イスラム以前のイランには、女帝がいて、彼女たちは帝国を統括し、王の称号、タイトルを与えられていました。貴族の女性も男性と同等の多くの権利を持っていました。我々イラン人は、それに関してはプライドが高いんです。

● ササン朝ペルシャ  
(226年～651年) イスラム以前

大石 私たちが世界史の授業で耳にしたことがあるササン朝ペルシャに至るまで何百年と時が経ちまして、『シェヘラザード』、『千夜一夜物語』など子供の頃にも読んだ物語の中の女性たちは立場のある人もいた、ということなんですね。

ショーレ そうです。シェヘラザードもプリンセスだったんです。アラブの王様のために物語を語る。今の大河ドラマ(注7)を見ると、イランのヒストリーと似ているなあと思うことがあるんですけども。そして、ペルシャのササン朝はイスラム教徒のアラブ人によって滅ぼされます。

大石 さて、ここまではイスラム以前だと。

ショーレ イスラム以前です。イランの宗教はゾロアスター教でした。

● イスラムの到来(7世紀)

ショーレ 7世紀、アラビア半島に起こったイスラム教勢力は周囲に勢力を拡大して、ペルシャのササン朝が滅ぼされ、イランの長い歴史に新たな1ページが開かれました。イスラム到来以後のイラン文化はイスラム文化と融合し「イランのイスラム文化」が形成されました。イスラム法に支配された家父長制社会を確立するために、女性の権利は押しつぶされました。このような女性に対する後進的な抑圧的な態度はイランの歴史の中で続いていきます。イラン女性が平等を獲得するのは20世紀に入ってからですが、女性の権利や地位の向上は短期間で終わってしまう。いったん花が開くんだけど、すぐ消えてしまうって感じなんです。

● 映画の誕生

大石 さて今日のテーマであるイランと映画と女性の話に入る前に、1900年頃、世界では何が

起きていたのか? 映画の誕生について振り返ってみましょう。

先ほどの地図をちょっと思い出してみてください。イランが真ん中にありましたが、左の方にヨーロッパがあると。その左の方のフランスではリュミエール兄弟が、シネマトグラフの初上映を行いました。

『工場の出口』という、工場から仕事が終わって出てくる人たちの映画。当時の人たちは写真が動くということで、驚いたと。そういうことがフランスでは起きていた。映画は1900年パリ万博でも上映されました。当時の万博は世界中の人が集まり、各国の様々な展示を見て文化に触れて、刺激を受けるという場だったようですが。その中に日本からはどのような人が行ったかということ、黒田清輝や藤島武二、高村光雲なども出品しました。そしてリュミエール兄弟たちは世界各地へカメラマンを派遣して、日本を含む、世界各地の映像を残しました。

ショーレ リュミエール兄弟がシネマトグラフを発明してから5年も経たない内に、イランの王様がパリを訪ねてシネマトグラフに出会うんですね。その機械を買って、イランに持って帰るんです。王族のドキュメンタリーを撮るためにカメラを回しただけですけども、イラン映画はそこから始まった。リュミエール兄弟がシネマトグラフを発明した5年後から、シネマトグラフというものがイランに入って、映像を撮っていたんですね。その後は映画館ができました。ドキュメンタリーを上映してたんですね。女性専用の映画館もできました。イラン映画、最初のトーキー映画は、インドで製作したんです。なぜならトーキーの機材がまだイランになかったので、監督、俳優、スタッフ全員がインドに行って映画を撮ったんです。

● 1910年～1933年

最初の女性雑誌『ダネシュ』の出現からパーレビ1世(レザー・シャー)政府(1925～1941)によるフェミニスト協会解散まで

ショーレ 女性の活動の話に戻ると、1910年から1933

年の約 23 年間は、イランでのフェミニズム活動の始まりと終わりが記された期間でした。

イラン最初の女性雑誌『ダネシュ』の出現から始まり、

PAHLAVI 1 世 ( レザー・シャー ) 政府 ( 1925~1941 ) によるフェミニスト協会の解散までの期間、女性の権利をめぐる運動は、検閲と批判から逃れるために暗躍という方法を取らざるを得ない事態に陥りました。

レザー・シャーはトルコを訪れ、トルコ共和国初代大統領・アタチュルクの近代化の努力に触発されて、教育を通じてトルコの女性の進歩的な権利を模倣しようとしていました。それまで女性はイスラム教徒なのでヒジャブかけるんですけど、レザー=シャーはですね、女性のヒジャブを着けなくても良いというルールを作るんですね。これは私のおばあさんの世代ですけども。

大石 ショーレさんのおばあさん。

ショーレ はい。おばあちゃんから聞いた話ですが、ヒジャブを着けなくて家から出て行くのには抵抗があった。男性は、自分の妻や娘がヒジャブなしで出かけることに反対したそうです。だからレザー=シャーが始めた改革はストップしてしまっただけです。

### ● パーレビ II 世 政府 ( 1941~1979 )

ショーレ そしてパーレビ II 世の時代が始まるんですけども。彼は先進的な考えだったので、制定された法律や改革の恩恵を女性は受けることになりました。女性から奪われていたいくつかの自由や権利が認められました。パーレビ II 世の時代、女性の雇用機会は大幅に増加しました。これは私のママの時代なんですけども。

大石 お母さんの時代。

ショーレ 私のお母さんは教頭先生でした。国会議員も女性が選出されて、女性の大臣も生まれました。女性が政府で役職に就くこともあ

りましたし、女性の参画が政府からも推奨されていました。この時代は女性が高いレベルの仕事に就いていても、家庭内でも問題無く女性が世に出ていきました。私はミニスカートで大学に通ってたんです。(笑)



### ● 1979 年 イスラム革命

ショーレ そして革命が起きます。

大石 イスラム革命が 1979 年です。

ショーレ みなさんイスラム革命の話は聞いたことがあると思いますけども、イランの歴史が、革命前革命後で大きく変わりました。生活の面だけではなく、社会のシステムが変わり女性の社会的な地位も変わりました。芸術も影響を受けました。美術、音楽、文学、そして映画も。

1979 年の革命以前の女性は、自身の業績は自分の功績と努力によるものであり、他者から制限されるものではないと信じていました。でも革命後の新政府はイスラム法に基づいた女性像を作るんですね。伝統的なモデルに回帰することを求めたんです。そして厳しいルールの元ヒジャブを着けることになりました。

レザー=シャーの時はヒジャブを外す、今度はジャブをかける。女性は身体の自由を奪われ、社会から排除され、男性の後に従わされました。男性の保護下におこうと考えてたんですね、政府は。以来、女性は体制に挑みヒジャブの強制などの差別的な政策に抗議してきました。

大石 なるほど。

ショーレ 女性は体制に挑み続ける、という言葉を見つけたんですけど。

大石 挑み続ける。

ショーレ 差別に対する抵抗を始めたんです。私、今の朝ドラ（注8）見てるんですけど、みなさん見てますか？ 朝ドラは今、ちょうど戦争が始まるくらい、1940年ぐらいかな。それを見て、どこでも同じだなと思ったんですよね。私の母も私も、苦しんできたのと同じように、日本の女性も苦しんでいたんだなあって思ったんです。（※映像＝イランの服装の変遷）

イランの女性は元々強いんですね。革命後はもっと強くなったと私は思うんです。私がいつもいうのはバネを押して手を離すと飛ぶ、というのと同じではないかと思うんです。抑圧が強くなると、女性はどこかで抵抗するか反発する。イランの女性は、ヒジャブひとつでも、いろんなカラーを使ったりアレンジしたり、ファッションショーまでやったりするんです。男性優位の社会の差別に抵抗して戦い、今でも戦っています。でも、ヒジャブを着けることだけは守らないといけないんです。これは法律ですから。

#### ● イラン映画における女性、革命前後

大石 イラン映画における女性の話を聞きたいと思います。革命を境にどのような変化があったか？ 比べてみていきたいと思います。パーレヴィII世の頃まで戻ることになるのですが。（※スライド＝革命前の映画のポスターの写真（1）Salome、（2）Ragga-seh-ye-Shahr、（3）Haft-Shahr-e-Eshgh）

ショーレ 当時のイラン映画では、マジョリティは商業映画、娯楽映画でした。その中には下品で性的な内容が含まれた映画が多かったのです。現実のイラン女性と、映画の中で描く女性はかけ離れていました。映画の中の女性は二つに分類されました。

一つはいわゆる健全な女性で、母であり、家から出ない、家庭外の仕事は一切持たない、良い妻で、健全な女性という分類。もう一方は、悪い女性という分類で（笑）、西洋の影響を受け、派手な服装でタバコを吸う、酒を飲む、踊る、伝統的なモラルティに反する行動を起こす、そういう女性。商業映画の会社は大きなスタジオがあって、映画業界を仕切っていました。イランの映画館では、インド映画、ハリウッド映画を真似した映画を上映していました。

1962～3年頃になると、商業映画の世界に対抗する映画作家が生まれるんですね。彼らは社会の正義を求めて映画を作る人達でマイノリティなんです。世界的に1960年代はヌーヴェルヴァーグが出現するんですが、イランにもニューウェイブの作家が現れたわけです。イランのニューウェイブの作家が作る映画は、社会の現実、弱点を描いてるので、政府が敏感になって、ニューウェイブの作家の映画は検閲にかかり、上映はできない。上映できたとしても小さな小屋（映画館）で短かい期間上映するばかりだったんです。彼らが作る映画を見ると、女性の扱いは、商業映画の描いてる女性と真逆でした。伝統的なステレオタイプの女性の登場を待ち望む観客の期待を裏切る、強く自立した女性のキャラクターを描きました。

● 映画『The House Is Black』（1962年）  
フォルグ・ファロフザード（詩人）監督作品

大石 これからイランの女性の監督が撮った映画の一部分を見たいと思います。これはどういう映画でしょうか？

ショーレ イランの20世紀の詩人でありペルシャ文学界に名を残しているフォルグ・ファロフザードの作った映画です。女性の気持ちであるとか性的なことを詩に書くことがタブーだった時代に、フォルグ・ファロフザードはオープンに、そういうことを詩に書いたんですね。私が子供の頃にはフォル-

グ・ファロフザードの詩集を読んじゃいけないと言われることもあったんです。なぜなら女性の気持ちを、あからさまに語ったので。彼女は『The House is Black (邦題：あの家は黒い)』という映画を撮りました。

大石 この映画の一部分をこれから見ます。今日のためにショーレさんが日本語の字幕をつけたので、日本語字幕で見いただきます。

ショーレ 短編、17分の映画です。ファロフザード自身がハンセン病の施設で2ヶ月、施設の人達と生活し、この一本を撮るんですけども。ナレーションは彼女の声で、コーランの言葉、彼女のポエムなどが入っています。作られた当時は、海外でも受け入れられなかったんですが、この映画はイランのニューウェイブの原点になってるんですね。(※部分上映)



彼女は施設で撮影中、二人の子供を可愛がっていて後に養子にして育てました。ファロフザードは36歳にならないうちに事故で亡くなりました。

大石 1965年からカヌーン(児童青少年知育協会)というのが始まるんですけど、これはどういうグループなんでしょうか？

ショーレ 王妃の後ろだてで子供のための本などを作る組織で、地方ヘトラックで絵本やプロジェクターを運び、映画も上映しました。イランの各地にカヌーンの支部がありました。イランは夏休みが長いので、カヌーンでは子供達に本を読んだり、お芝居をやったり、映画作ったりしました。カヌーンは、子供のワークショップだけでなく、子供のための映画を作るアーティストを呼び、その中

には、キアロスタミ、アミール・ナデリもいました。

カヌーンの中で、子供が主役の映画を作ったんですね。ニューウェイブの作家はここから生まれて映画を作りました。

革命後は、多くの映画が検閲にかけられます。けれども、ニューウェイブの作家が作っていた映画は検閲をパスすることができるんです。厚い検閲の壁を乗り越えます。ニューウェイブの巨匠・メールジュイ監督の映画『牛』をテレビで見たホメイニ師は「このような映画を作ればいいです」と言ったそうです。革命から三年経ってたんですけど、やっと映画の産業がまた、動き出したんです。

イラン映画はリアルフィクションと呼ばれることがあります。フィクションをリアルに描く。ドキュメンタリーとフィクションの境が無いような表現をします。現実からテーマを選んでフィクションにするんです。そして素人を使って映画を撮るんです。撮影している時の偶然を注意深くキャッチして、映画に入れるんです。長回しを多く使うのはなぜかと言うと、見る側が物語に共感する時間を与えるためです。結末を観客に委ねるオープンエンディングが多いのは観客が劇場を出てから自分なりのエンディングを作るためです。

革命が起きて三年ぐらい、商業映画を作っていた監督たちはアメリカや海外に渡ったり、仕事を辞めました。何をどう作れば検閲を乗り越えられるか？ 分からない時代があったんですけど、イスラムの厳しいルールの中でも、再びイラン映画は生まれたんです。

#### ● 1980年代の女性監督たち

ラクシャン・バニエテマド、 プラン・デラクシャンデ、 タヒミーネ・ミラニ

ショーレ 80年代に入ると、女性監督が活発に作品を作るようになります。

特に巨匠になっているのはラクシャン・バニエテマド、プラン・デラクシャンデ、タヒミーネ・ミラニ。彼女たちは女性の権利

とか社会の中での地位に焦点を置いて、女性の声を代弁するような作品を作りました。

大石 映像研究科映画専攻でワークショップを行っているナグメ・サミニはバニー・エッテマード監督の作品で脚本家デビューしています。2006年です。その後で、男性の監督が女性を描くという時代がやってきます。

ショーレ 2000年に入ると、女性が主役の映画が増えます。『別離』アスガー・ファルハディ監督作品はみなさん見たことあるかも知れません。女優が演技の中で女性の気持ちを語る、そうした映画を男性の監督が作る機会が増えました。ひとつだけ加えたいんだけど、イランの映画界では、いろんな映画の分野で女性が活発に仕事をしてるんですね。例えば今イランの編集ベストワンは女性なんです。カメラマンも女性が増えました。

大石 最後にもう一つ、『ホテル・ニュームーン』（注9）という2020年に日本とイランの合作で作られた映画がありまして、ナグメ・サミニが脚本を書いて、監督は映像研究科映画専攻・筒井武文教授です。この映画は母親の世代から娘の世代へ、現代のイランと日本がどういう関係であったのか描かれている映画なので、DVDなどでご覧いただきたいと思います。

ショーレ これは私がプロデュースした合作映画なんですけれども、イランの若い女性とシングルマザーの話で、今のイランを見られると思います。

大石 では茶話会にうつって、そこでもおしゃべりしましょう。ということで、今日はどうもありがとうございました。

ショーレ ありがとうございました。



トーク終了後に催された茶話会の様子。  
(了)

#### 【注釈】

- 1 『映画の旅びと イランから日本へ』：ショーレ・ゴルパリアン 著、みすず書房、2021年9月刊行
- 2 『おしん』：NHK 連続テレビ小説、原作・脚本 橋田壽賀子、1983年4月～1984年3月放送
- 3 『はね駒』：NHK 連続テレビ小説、寺内小春 作、1986年4月～10月放送
- 4 映画『ライク・サムワン・イン・ラブ』：アッバス・キアロスタミ監督、フランス × 日本合作映画、2012年公開
- 5 国際脚本ワークショップ：2015年度から東京藝術大学映像研究科映画専攻の学生を対象に行っている。2024年度は7月30日～8月7日、馬車道校舎に於いて開催予定
- 6 『月刊シナリオ』ナグメ・サミニ インタビュー（聞き手 大石みちこ、通訳 ショーレ・ゴルパリアン）、日本シナリオ作家協会発行、2020年8月号掲載
- 7 NHK 大河ドラマ『光る君へ』：大石 静 作、2024年放送
- 8 『虎に翼』：NHK 連続テレビ小説、吉田恵里香 作、2024年4月から放送
- 9 映画『ホテル・ニュームーン』：筒井武文監督、ナグメ・サミニ 川崎純 脚本、イラン × 日本合作映画、2020年公開